

# 表現の基礎となるピアノ授業について

ー近畿圏の保育者養成校シラバスから本学のピアノ授業を考えるー

川畑尚子（筆頭）、萩原恵里、大野明子、尾形真菜、河野美華、  
小餅谷ゆかり、権田志帆子、皿谷美貴、多田牧子、古川真由美

## 1. はじめに

幼稚園教育要領、保育所保育指針における【表現】の内容は「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」と記載されている。子どもたちが音楽に親しむためには、日々一緒に過ごしている保育者が音楽への親しみを持っていること、子どもたちが親しみをもって歌を歌うためには、保育者が豊かなハーモニーが奏でられること等が求められるだろう。わが国では草創期より就学前教育・保育施設での音楽表現にはピアノが用いられていて（西海，2015）、身近な楽器として今日も多く保育者養成校でピアノの授業が行われている。

保育でピアノが使われる利点として、調律されている楽器で子どもにメロディーを弾き示すことができることや、多声部の音域を一度に響かせることで和声感を体感させられることなどがあげられる。幼児が音楽を体験する環境において、その環境を与える立場となる保育者が正しいリズム感を持って豊かに表現できることは重要であると考え。学生時代により多くの体験をするか否かは、将来、保育者として実践の場に立った時の質に繋がっていくと思われる。高地（2016）は、保育者養成校においてピアノ実技の授業は、技能習得だけでなく、計画性、創意工夫力、共感力、集中力、克己の力の5つの内面的成長が育まれるとし、5つの具体例とそれを援助するために求められる指導者像を論じている。ピアノの技量は理屈や方法のみで上達するものでなく、日頃から音楽に親しみ、学び、聴く耳を養い、反復を繰り返して体得するものである。発表の機会を多く持って人前で表現することの難しさを経験し、その克服のために更なる経験を積んではじめて身に付くもので、そのプロセスは学生が保育者としての専門性を高めていく第一歩として、どれも大事な要素と考える。

大阪キリスト教短期大学（以下、「本学」と略す）のピアノ実技授業は、2017年度より通年科目から半期科目となり、それに伴い科目名も「器楽Ⅰ」「器楽Ⅱ」から「ピアノ奏法ⅠA・B」「ピアノ奏法ⅡA・B」へ変更された。ピアノ学習経験が少ない学生であっても、バイエル教本と本学が独自に作成した教本〈ピアノミュージック〉（注1）を2年間で終えることで、保育に必要な

なピアノ演奏技術をある程度修得出来ると考え、長年、内容は大きく変えずに授業を行ってきた。しかし先行研究でピアノ初心者が増加が報告（小松,2013、吉村,2015、他）されているように、本学でもピアノ学習経験の浅い入学生が増えており、入学前ピアノレッスンを開催したり（川畑,2015）、声楽の授業と連携して同じ弾き歌いの課題を与えたりと、保育に必要な演奏技術を2年間で少しでも向上させるための模索を続けている。

本論文は、近畿圏の保育者養成校のピアノ科目のシラバスを本学のピアノ実技授業を担当する教員全員で調査した。その結果を踏まえて、近畿圏でのピアノ授業の傾向や工夫を知り、表現の基礎となるピアノ授業が技能習得だけでなく、【表現】にある「音楽に親しむ」機会ともなる方向性を目指すために、本学におけるピアノ実技指導の課題を考えることを目的とする。

## **2. 本学の授業概要**

### **2-1 音楽関連授業**

2017年度、本学において開講されている音楽関連授業は、1年次に「ピアノ奏法ⅠA」「ピアノ奏法ⅠB」「声楽Ⅰ」「こどもと歌」「こどもと音楽表現」「音楽理論」（各半期）、2年次に「器楽Ⅱ」「声楽Ⅱ」（各通年）、「音楽理論Ⅱ（伴奏付特講）」（半期）である。また2013年度より始まった音楽プログラム（注2）には1年次「幼児音楽Ⅰ」、2年次に「幼児音楽ⅡA」「幼児音楽ⅡB」「公開演奏」が開講されている。

「ピアノ奏法ⅠA」「ピアノ奏法ⅠB」「声楽Ⅰ」は保育士資格と幼稚園免許を取得するための免許必修になっており、「こどもと歌」は保育士資格の免許必修である。「器楽Ⅱ」「声楽Ⅱ」は保育士資格の選択必修であるため、2年生はピアノか声楽のどちらかを履修する。現状としてはピアノを選択する学生の割合が多いが、ピアノと声楽の両方を履修する学生や、声楽だけを履修する学生もいる。

### **2-2 「ピアノ奏法ⅠA・B」「器楽Ⅱ」の授業内容**

1年生は、保育者に必要なピアノ演奏力を体得させるために基礎的な知識と技術を身につけることを目標にしている。具体的には、読譜力をつけるために多数の楽曲に触れてほしいと考えて、「ピアノ奏法ⅠA」ではバイエル89番（注3）、「ピアノ奏法ⅠB」では〈ピアノミュージック〉全45曲中12曲終了を目指している。また、弾き歌いについては、保育現場でよく歌われている「おはよう」「おべんとう」「おかえり」の課題に加え、後期に声楽で課されている弾き歌い課題の一部を「ピアノ奏法ⅠB」でも指導するといった授業間での連携を行っている。

2年生は、演奏力向上を目指すとともに保育現場において音楽活動が行える力を身につけることを目標にしており、弾き歌いについては毎半期に2曲程度を課している。また、アンサンブルの機会として連弾を取り入れたり、就職試験対策として初見視奏を行う教員もいる。

### 3. 研究方法

表現の基礎となるピアノ授業について傾向や工夫を知り、本学のピアノ実技指導の課題を考えると、文部科学省 HP 内にある「国立大学・国公立短期大学」の地区別一覧を参照し、近畿 2 府 4 県（大阪、京都、兵庫、滋賀、奈良、和歌山）における保育者養成校（短期大学）を割り出した。そこからインターネット上で閲覧可能な 2017 年度シラバスの中でピアノ実技指導をしていると判断した科目を調査した。調査時期は 2017 年 4 月から 5 月である。

### 4. 結果と考察

#### 4-1 授業形態の分類

近畿 2 府 4 県における保育者養成校（短期大学）を割り出したところ 42 校あった。そのうち、インターネット上で 2017 年度シラバスを確認することができた 28 校を本研究の調査対象校とした。今回の調査にあたり、対象となった短期大学のピアノ実技授業が通年で行なわれている学校や、半期、学期で開講されている学校などがあったため、コマ数（シラバス数）を出すこととした。その結果、半期開講 81 コマ、通年開講 7 コマ、学期開講（注 4）1 コマの計 89 コマの授業が調査対象に該当した。これらの授業シラバスを精査していくなかで、本学のように 90 分の授業内で主にピアノ実技指導を行っている授業がある一方、ピアノに加え他の内容も取り入れて行っている授業も散見された。そこで、本学のように授業内で主にピアノ実技指導を行っているとシラバス上から判断した授業を【グループ A】、ピアノ実技指導に加え、その他の内容も取り入れていると判断した授業を【グループ B】とし、2 つのグループに分類した。分類結果は表 1 のとおりである。

表 1. 学年別授業形態の分類

調査対象校	授業科目(数)				
	1 年生グループ A	2 年生グループ A	1 年生グループ B	2 年生グループ B	合計
28 校	15	18	35	21	89

授業形態の分類を割合で見ると、全学年ではグループ A の 37%に対してグループ B が 63%となっており、ピアノ以外の内容を取り入れている授業が多いことがわかる（図 1）。これをさらに学年別で見ると、1 年生ではグループ B が 70%を占めており、全学年でみるよりも高くなっている（図 2）。一方、2 年生の割合はグループ A が 46%、グループ B が 54%、授業数で見ても前者が 18 コマ、後者が 21 コマであることから授業形態の割合にそれほど差がない結果となった（図 3）。

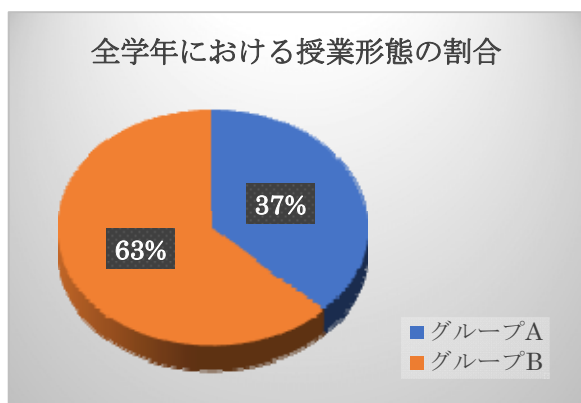


図 1. 授業形態の割合（全学年）

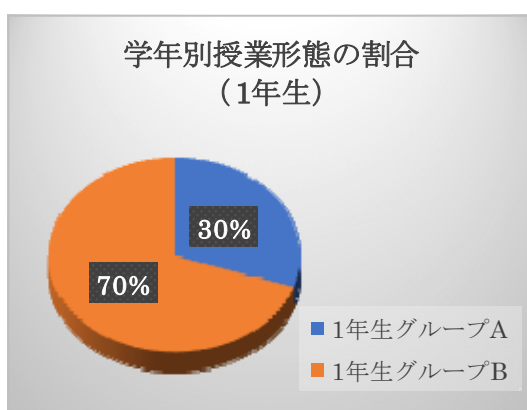


図 2. 授業形態の割合（1 年生）

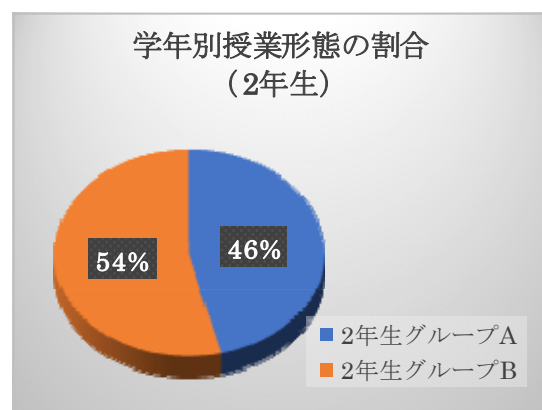


図 3. 授業形態の割合（2 年生）

#### 4-2 グループ B で行われているピアノ以外の授業内容

ここでは、グループ B に分類された授業において、ピアノ以外のどのような音楽的内容が取り入れられているかを各シラバスから精査した結果、それらの内容を 10 項目に分けることができた。項目ごとに実施されている授業数を集計し、学年別で示したのが下の表 2 である。

表 2. グループ B におけるピアノ以外の授業内容が実施されている学年別授業数

内容項目 \ 学年	1 年生	2 年生
伴奏付け (コード伴奏含む)	20	17
楽典	22	2
声楽	9 (オペレッタ 1 含む)	5
初見視奏	6	注 5)
手遊び	3	3
移調奏	2	2

連弾	2	注 5)
合奏	1	3
設定保育	1	2
合唱	0	2

表 2 の結果からさらに、10 項目の内容がそれぞれ実施されている割合を全学年、および学年ごとで示したものが図 4 から図 6 にあげた 3 つの横軸グラフである。なお、各グラフの縦軸にあたる授業内容について、「初見四視奏」と「連弾」は既述した通り、本学では 2 年生の授業で教員によっては取り入れている内容であるため、1 年生においてのみピアノ以外の授業内容として考えるものとし、図 4 の全学年と図 6 の 2 年生ではあげていない。また、合唱については、2 年生で実施している授業が 2 コマあったが、1 年生では全く行われておらず比較対象とならないため、あげていない。

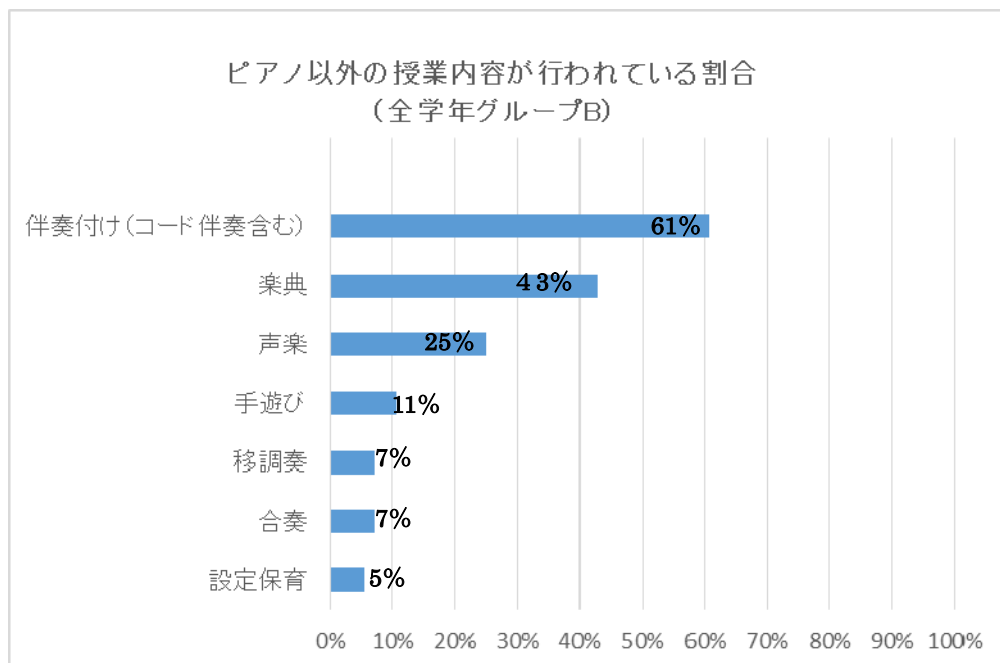


図 4. ピアノ以外の授業内容が行われている割合 (全学年グループ B)

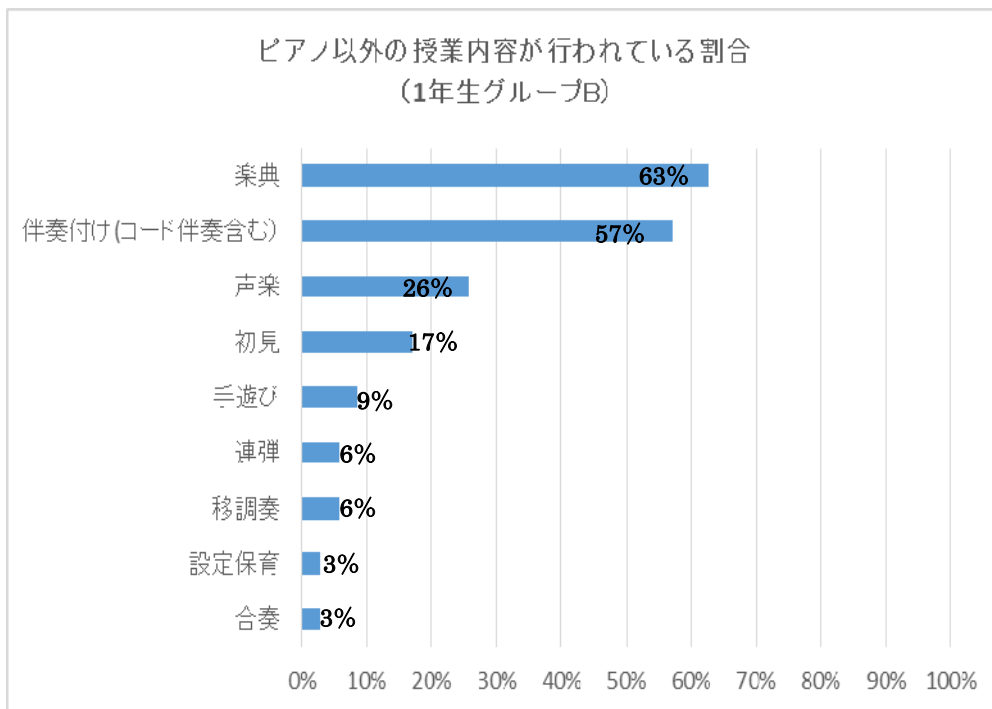


図 5. ピアノ以外の授業内容が行われている割合 (1 年生グループ B)

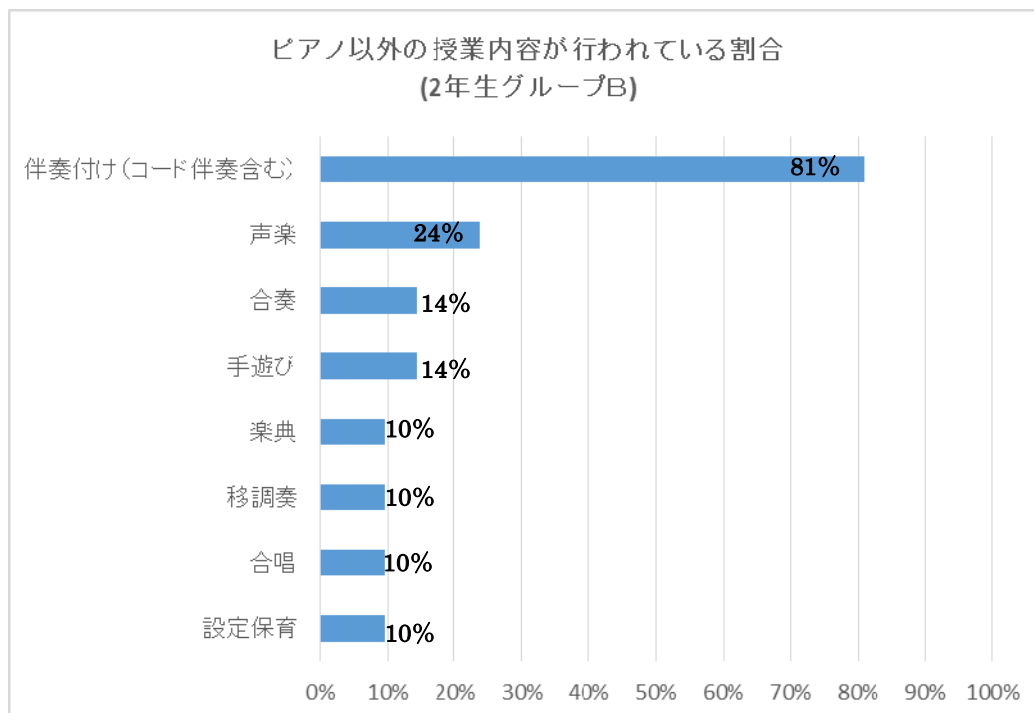


図 6. ピアノ以外の授業内容が行われている割合 (2 年生グループ B)

まず全学年で見ると、伴奏付け（コード伴奏含む）が 61%と、半数以上の授業で実施されて

いることがわかる。次に高い割合を示しているのは43%の楽典で、5割は切っているものの、これら上位2つの授業内容が多く取り入れられている結果であった。

続いて学年ごとで見えていくと、1年生は楽典63%、伴奏付け（コード伴奏含む）57%の順で上位を占めており、全学年で見た上位2つが入っているものの順位は入れ替わっていることがわかる。一方、2年生の上位は伴奏付け（コード伴奏含む）81%、その次に声楽の24%となっており、伴奏付け（コード伴奏含む）が圧倒的に高い割合を示している。この結果から、2年生の授業においてコード伴奏も含めた伴奏付けの重要性が多くの養成校で考慮されていることがうかがえる。今釜（2013）も、1年次で基本三和音や伴奏形、セブンスコード、両手伴奏について学んでも実践的にそのコードを理解するだけの力が整っていないとし、ピアノを楽譜通り弾く力がつき、理論的なことを一通り学んだ2年生になってコード弾きの重要性が理解できるようになる、と述べている。

またここで、1年生では63%と一番高い割合を示している楽典が2年生では10%と、両者に大きな差がみられたことについても注目したい。岩佐、他（2015）の調査では、音楽基礎知識の理解度と演奏技術には相関があることを明らかにしており、入学時においてピアノ初学者が多くなってきている昨今の傾向からも、音楽基礎知識を入学後早期に指導する必要性を述べている。また磯部（2014）も、初心者にとって最初の難関である読譜ができなければ練習をしたくても自らそれに取り組むことができないと述べ、1年生前期から初心者には楽典やソルフェージュを取り入れたピアノレッスンを実施し、その効果について受講者からアンケートを行っている。その結果、90%近くの学生が「役に立った」と回答しており、効果があることを明らかにしている。これら先行研究をはじめ、読譜するために最低限必要な音楽の基礎知識を初めの段階でピアノ指導と並行して行う必要性について多くの養成校でも考慮されていることが、1年次で楽典が一番高い割合を示した結果ではないかと考えられる。一方、2年次になると楽典は10%となるが、伴奏付け（コード伴奏を含む）の実施において非常に高い割合が示された。この傾向は、既述したように1年次で理論的なことを学びながらピアノを楽譜通り弾く力を養ったうえで、2年次に実践的なコード伴奏や様々な伴奏法を習得させるといった言わば基礎から発展へとつながる体系的カリキュラムが2年間を通して構成されていると言えるのではないだろうか。

次に声楽について見てみると、1年生26%、2年生24%とほぼ同じ割合であった。声楽を取り入れている授業の中には、ピアノと声楽の授業を90分の授業内で半分に時間を区切って実施している形態も複数見られた。

続いて、手遊び、移調奏、設定保育、合奏について1年生と2年生を比較すると、いずれも高い割合ではないが1年生よりも2年生においてわずかに高い割合となっていることが分かる。なかでも手遊び、設定保育に関して言えば、実習をはじめとする保育現場を意識した実践的な内容を、2年次ではより多くの授業で取り入れている結果と考えられる。

一方、移調奏や合奏は基礎を養ったうえでの言わば発展的な授業内容であり、子どもの声域発達に対応できる伴奏力をつけることや、学生自ら合奏を体験することが保育者に求められる資質の一つである豊かな感性や創造性を育む機会となっているのではないだろうか。麓（2015）は、多くの保育者養成において、幼児の表現を受け止め共感できる感性や、子どもの素朴な表現を遊びに展開することのできる創造性が学生に育つための様々な教育プログラムが模索されているが未だ確立には至っていない現状について言及している。これらについては今後、様々な授業が試行されながら保育者養成校における音楽教育の目的が再検討されていく必要があるだろう。

以上のように、グループ B に分類された授業において、90 分の時間内でピアノ以外に様々な内容を組み入れた授業が展開されていることがわかった。それは、ピアノを演奏するうえで必要となってくる読譜理解のための楽典や、弾き歌いに必須であるコード伴奏、さらには実習や保育の現場を想定した、より実践的な内容であった。

#### 4-3 シラバスからみた授業方法の工夫

ここでは、今回の調査対象となった全 89 コマのシラバスから、ピアノ授業を効率（円滑）的に行うための工夫と考えられる記載内容で、且つ、現在本学のピアノ授業に無い 3 つの項目（表 3）をあげ、本研究におけるシラバスからみた「授業方法の工夫」として着目し、検討する。

表 3. シラバスからみた授業方法の工夫 3 項目

1. 練習時間の記載
2. 中間演奏（発表・試験）の実施
3. 記録シートの導入

次に、表 3 であげた 3 項目を取り入れている授業数をグループ及び学年別に示したグラフが図 7 から図 9、グループ及び学年別授業数に対する割合を示したものが表 4 から表 6 である。

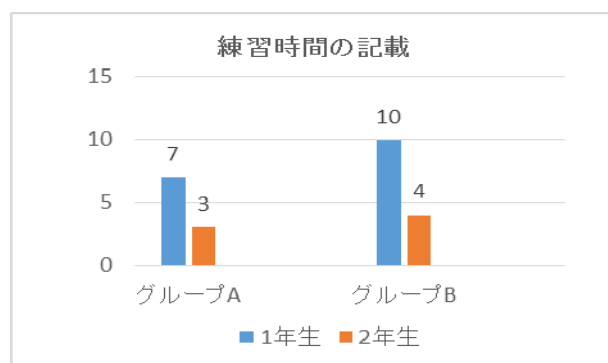


図 7. グループ及び学年別授業数  
【1. 練習時間の記載】

表 4. グループ及び学年別授業数の割合  
【1. 練習時間の記載】

	グループA	グループB
1年生	47%	29%
2年生	17%	20%



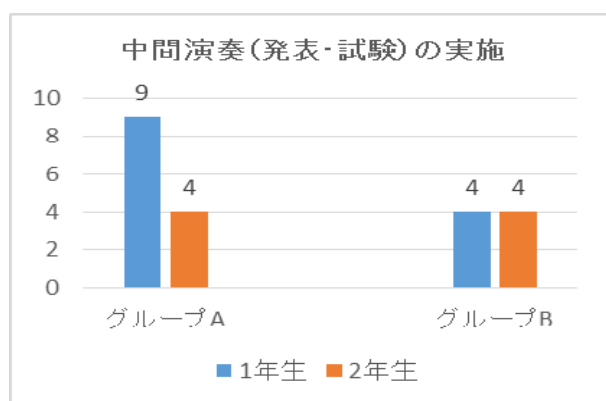


図 8. グループ及び学年別授業数  
【2. 中間演奏（発表・試験）の実施】

表 5. グループ及び学年別授業数の割合  
【2. 中間演奏（発表・試験）の実施】

	グループA	グループB
1年生	60%	11%
2年生	22%	19%

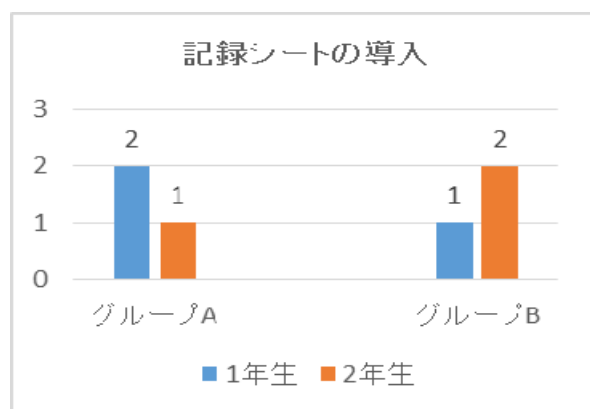


図 9. グループ及び学年別授業数  
【3. 記録シートの導入】

表 6. グループ及び学年別授業数の割合  
【4. 記録シートの導入】

	グループA	グループB
1年生	13%	2%
2年生	5%	9%

まず練習時間の記載について、実技系の授業では日々の練習が欠かせないことは周知の事実であり、多くのシラバスにおいても特記事項や授業外学習などの欄に、「日々の練習を行い授業に臨むこと」といった内容の記載がされている。その中でも特に、一日あたりの練習時間、週あたりの練習時間を具体的に明記しているものについて「授業方法の工夫」とみなし、カウントした。

その結果、各グループとも1年生の授業シラバスの方が、2年生よりも多く記載されていることがわかる（図 7）。割合でみると、1年生グループ A が 47%と一番高い割合を示し、続く1年生グループ B が 29%となっている（表 4）。このことは既述したように、昨今の入学時におけるピアノ初心者の増加に伴い、初めの段階で学生へ練習時間の習慣化を促している結果ではないかと推測する。

次に、中間演奏（発表・試験）の実施については、各授業の最終講において行う実技試験とは別に、人前で演奏する機会として授業内での発表や、実技チェックを複数回行っているケースに

ついてカウントした。この発表の場が評価に関連しているかどうかではなく、あくまで人前で演奏する機会が複数回行われていることで「授業方法の工夫」とみなした。

こちらの結果も練習時間の記載と同様、1年生グループ A が 60% と一番高い割合を示した(表 5)。また、2年生においてはグループ A、B 共に同数で実施されている。佐藤(2014)がピアノ、弾き歌いの技術向上のために行った 3 つの取り組みの中の「月一弾き歌いチェック」によって、人前で弾くことに慣れることや就職試験の対策に繋がったことを述べている。また学生側もこの様な機会に対し、気が引き締まり、やる気が出るといった肯定的な感想を多くあげている。実技科目における人前で演奏することの緊張は、学生にとって精神的な負担であることは言うまでもないが、人前で弾くことに慣れることへの対策が就職試験をはじめ、将来現場で演奏するうえでも必要なのではないかと考える。

3 目目にあげた記録シートの導入については、各グループ及び学年共に現時点で導入している授業数は 1~2 コマという結果で、かなり少なかった。しかし、実技系授業においても教員の一方的な指導ではなく、学生が主体的に取り組む中で自ら問題点に気づき、その改善策を導き出せるようなアクティブ・ラーニングの方法は有効であり、記録シートの導入はその一環となるのではないだろうか。ピアノ授業のなかでワークシートを導入している報告(野口他, 2010)によると、学生の大多数がワークシートについて肯定的に捉えており、その理由として、ワークシートを通した教員とのコミュニケーションが一番多くあげられている。教員から褒められる、コメントを記入してもらうことが励みになるようである。一方で、ワークシートが学生自身のステップアップに向けた気づきや、課題設定の場と意識している者が少ないことについても言及している。このことから、記録シートを導入する意義を明確化させ、学生へもそれを意識づける必要性があるとも考えられる。

## 5. 結果と考察からみる本学ピアノ授業の課題

今回の調査で、近畿圏の保育者養成校におけるピアノ実技指導授業は 90 分内で、ピアノ指導に加えてその他の内容を取り入れている学校が多い傾向にあることが示唆された。2 年という限りある時間の中で保育者に必要な技術を身につけるための方策と思われる。

### 5-1 楽典

ピアノ指導以外で多くの学校が取り入れている内容が楽典である。特に 1 年生で楽典を取り入れている学校が多いことが明らかになった。保育現場において身近な手遊びや、身体活動にも音楽の基礎であるリズム感や拍感などは重要であり、表現の基礎として大事な要素と考える。本学では、1 年次に「音楽理論」を履修すれば、音符やリズムなど音楽のきまりや仕組みについて半期 90 分×15 回をかけて学ぶことが可能である。しかし選択科目のため全員が受講しているわけではない。既述した先行研究からも読譜のために音楽の基礎知識を身につけることの重要性が

言われており、ピアノを弾く時や歌を歌う時も活かすことができる楽典をどのように取り入れるかは課題である。

本学のピアノ授業内では、シラバス上に記載はないが、各教員が課題楽曲を通して、個々の学生に音符の長さや拍、拍子などを説明している。個々に説明する利点としては、①学生の進度やペースに合わせて説明できる②理解できるまで何回でも説明できる③理解できていない部分をピンポイントで説明できるなどが挙げられる。一方で、同じ内容を繰り返し個別に説明しなければならない時間的な難点もあり、授業時間内でいかに効率的に音楽の基礎的な仕組みを伝えるか工夫が求められる。

## 5-2 コード（伴奏付け）

今回の調査では、2年生でコード（伴奏付け）を取り入れている学校が非常に多いことが明らかになった。コードの種類としては、ハ長調、ヘ長調、ト長調の主要三和音までを取り上げている学校がほとんどで、ニ長調まで教えているのは2校だけであった。本学では楽典同様に「音楽理論」科目でコードや伴奏付けも学ぶことができる。1年生から始めて2年生の「音楽理論Ⅱ（伴奏付け特講）」も履修すれば、1年半かけてコードや伴奏法を学ぶことが可能である。しかしながら楽典同様に選択科目になっており、限られた学生のみ履修しているのが現状である。

保育現場ではメロディー譜にコードのみ記入された楽譜（コード譜）による演奏を求められることも考えられる。また、コードの実用が出来ると楽曲の構成パターンが理解しやすくなるといった利点もある。今後、本学独自の教本〈ピアノミュージック〉にもコード入りのメロディー譜を入れるなど学生全員がコードを知る機会を設けることも考えたい。

## 5-3 声楽・手遊びなど

本学では、先述の通り1年生、2年生ともに声楽単独の授業があり、弾き歌いの指導は声楽の授業で行っている経緯がある。近年、ピアノ授業の個人指導という特性を活かし、声楽授業との連携で弾き歌い課題の一部をピアノの個人レッスン内でも指導している。2つの科目で共通の課題に取り組むことは、それぞれの専門の立場から指導でき、ピアノ学習経験が浅い学生の負担も軽減できると思われる。学生にとって弾き歌いのレパートリーを増やす事は実践力をつけるために必要であり、学生自身が音楽に親しみ、楽しさを味わう経験にもつながると考える。

今回の調査結果から、ピアノ授業内で手遊びや設定保育を行っているケースも見られた。本学では手遊び、設定保育ともに他の科目で行われている。音楽の基礎知識、ピアノや声楽の基本的な技術が身に付いた上で、実践的な学びを受けることは表現の幅が広がると思われる。声楽と同様、総合的に学生の力が伸びるように担当教員と連携していきたい。

## 5-4 練習時間・記録シート・中間演奏（発表・試験）の実施

練習時間について、現在本学では授業時間以外の学習として「毎週出される課題の練習準備」と「演奏向上練習時間のためできるだけ鍵盤に触れる時間を多く持つこと」と記述しているが具

体的な時間は提示していない。しかし学生のモチベーションを保ち学習意欲を高めるために、具体的な練習時間や練習方法を示すことは大切であり、ピアノ学習経験の浅い学生にとっては指標になると考える。記録シートについては今回の調査では導入している学校は少なかったが、学生本人が自覚を持って課題に取り組むために有効と思われる。現在本学では教員が記録シートを書いているが、学生用シートを作成し、課題の進め方を一緒に考えたり 15 回の計画を立てるなど、使い方も含めて導入を検討したい。続いて中間演奏（発表・試験）について、本学は現在 15 回目に発表としている。発表準備に約一カ月を要していて、中間演奏を実施する場合にはどのように行うか教員間で議論が必要だが、目標を持つと自然と課題と向き合う時間が増え演奏技術が向上する可能性もある。学生自身が創意工夫し集中して練習に励むことが音楽に親しむ第一歩と考え、その方法として練習時間、記録シート、中間演奏など導入を検討したい。

## 6. おわりに

本論文は、シラバスから近畿圏の保育者養成校ピアノ授業について調査し、結果と考察を行った。シラバスから授業内容を読み取るには限界があると感じたが、大きな枠での傾向や工夫を見ることはできたと考えている。また今回は本学のピアノ授業の課題を見出すために、ピアノ実技指導をしていると判断した科目を取りだし調査を行ったが音楽科目全体を見る必要があり、今後の課題である。しかしながら、ピアノ教員全員で目的を持って調査し考察した内容は、授業をより良いものにしていくと確信している。

本学は、現在ピアノ、理論、声楽がそれぞれ科目として独立しており、充実した内容になっている一方で、選択科目が多く、受講しない学生がいることが課題として挙げられた。声楽、音楽理論との連携、さらには手遊びや設定保育など関係する授業とも連携して 2 年という短い期間で、学生に保育者としての基礎をしっかりと伝えていけるように努めていきたい。

幼稚園教育要領改訂に伴い 2017 年 6 月に文部科学省から教職課程コアカリキュラムが示され、音楽は「領域に関する専門的事項」の「幼児と表現」に含まれる。表現の基礎となる知識や技能とは何か、続けて考えていきたい。

## 注

1. 本学が独自に使用している教本で、全 45 曲の楽曲を収めた楽譜である。ブルグミュラー、ツェルニーの他に、マーチやギャロップなど身体活動に使える曲が収録されている。
2. 音楽プログラムの内容は「大阪キリスト教短期大学における『幼児音楽プログラム』について 足からの歩みと今後の展望」大阪キリスト教短期大学紀要 第 56 集 136 - 150 頁に詳しく記載している。
3. 本学では、バイエル教則本を 82 番と 106 番以外の全曲を弾かせている。
4. 4 学期制の導入により、授業が全 8 回のシラバスとなっている。
5. 本学のピアノ授業は、教則本と弾き歌い指導を中心に行っている。従って、本研究の授業形態の分類において、【グループ A】の定義は、（本学のように）教則本、弾き歌い、マーチな

どの律動曲のピアノ指導を中心に行っている授業とした。一方、【グループ B】は、【グループ A】に含まれるピアノ指導以外の内容も同時に行っている授業とした。その内容のうち、「連弾」と「初見」について、本学は 1 年生では行っていないが 2 年生の授業では一部の教員によって実施しているため、授業形態の分類においても、2 年生の授業内で行われている「連弾」や「初見」はピアノ以外の内容とはみなさないこととした。

## 引用・参考文献

- ・磯部澄葉「保育者養成課程におけるピアノ初心者へのレッスン支援ーコードネーム・オリズムピックを用いた指導法の提案ー」『金城学院大学論集 人文科学編 10 巻 2 号』2014 年、19-31 頁
- ・今釜亮「保育者養成における音楽の授業実践ー総合的な音楽力と保育力の育成を目指してー」『筑紫女学園大学・筑紫女学園短期大学部紀要（8）』2013、241-251 頁
- ・岩佐明子、富田英子、烏丸佐知子「保育者養成校における音楽教育についての調査研究ー音楽基礎知識及び鍵盤楽器の練習量と演奏技術の観点からー」『京都文教短期大学研究紀要第 53 集』2014、21-30 頁
- ・奥千恵子「保育者養成と演奏技法ー保育指導としてのピアノ奏法ー」『四天王寺大学紀要第 48 号』2009 年、137-154 頁
- ・川畑尚子「保育者養成校におけるピアノ指導法の一考察 - 演奏技術向上の観点から見た入学前ピアノレッスンの効果について - 」『大阪キリスト教短期大学紀要第 55 集』2015 年、157-163 頁
- ・衣川久美子・山崎和子・坂井康子「保育士、幼稚園・小学校教諭養成校で用いられているこどもの歌ー近畿圏内の 1989 年から 2012 年に出版されたテキストの分析その 1ー」『甲南女子大学研究紀要第 49 号 人間科学編』2013 年、85 - 97 頁
- ・衣川久美子・山崎和子・坂井康子「保育士、幼稚園・小学校教員養成課程における「器楽・声楽」の指導ー学生の実態調査による 2006 年～2013 年の経年分析ー」『甲南女子大学研究紀要第 50 号 人間科学編』2014 年、25-41 頁
- ・小松洋子「保育者養成校のピアノ初心者に対する指導についてーピアノ特補の試みー」『聖徳大学幼児教育専門学校研究紀要 第 5 号 別刷』2013 年、1-9 頁
- ・佐藤邦子「保育者養成における弾き歌い指導について」『広島女学院大学人間生活学部紀要創刊号』2014、59-70 頁
- ・高地誠子「【研究ノート】保育者養成校においてピアノ実技の授業を通して育まれる内面的な成長と求められる指導者像」『小田原短期大学紀要第 46 号』2016 年、88-92 頁
- ・戸川俊「保育者養成校における実習指導についての一考察ー実習受入現場でのアンケート調査からー」『近畿大学豊岡短期大学論集第 11 号』2014 年、37-45 頁
- ・仲野悦子「保育者養成校におけるピアノ実技指導のあり方ーS 短期大学生の実態からー」

『岐阜聖徳学園短期大学紀要』2013年、35-56頁

・西海聡子「保育におけるピアノの源流をたどるー明治初期の幼稚園における唱歌とその伴奏楽器についてー」『東京家政大学研究紀要 第55集(1)』2015年、31-38頁

・野口美乃里、坂井加奈「ピアノ授業における新しい取り組みー譜読みタイム・ポイント制・ワークシートの導入ー」『西九州大学短期大学部幼児保育学科紀要第41巻』2010、51-60頁

・麓洋介「保育者養成における音楽教育についての一考察ー「実技」「楽典」「表現」の関連づけによる総合的・段階的な指導のための授業モデルー」『愛知教育大学研究報告 教育科学編(65)21』2015、21-26頁

・宮脇長谷子「保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題ー養成校へのアンケート調査を通してー」『静岡県立大学短期大学部研究紀要 15-W 号』2001年、1-11頁

・吉岡淳子・芝崎三和「【研究ノート】保育者養成におけるピアノ指導についてー学生の自己効力感に着目してー」『新見公立短期大学紀要 第36巻』2015年、59-66頁

文部科学省ホームページ [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/link/daigaku3.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/link/daigaku3.htm) (最終閲覧日 2017.8.13)